

『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』の「地学基礎」，『地学』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

「地学基礎」

1 前文

「地学基礎」は、地球環境の変化、日本の自然環境とその恩恵や災害など、日常生活や社会との関連を図りながら、地球や地球を取り巻く環境に関心をもたせ、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。共通テストとしては今回が6度目の実施、新たな学習指導要領のもとで実施された共通テストとしては2度目の実施となる。

令和8年度共通テスト本試験の「地学基礎」受験者数は48,438人で、昨年度に比べ2,153人と昨年に続いて、大きく増加した（一昨年度→昨年度は2,912人の増加）。また、平均点は28.17点（50点満点）で、昨年度より-6.32点と大幅に下降した。

評価に当たっては、「大学への入学志願者を対象に、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的として、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする。」という共通テストの趣旨に基づき、本年度の「地学基礎」本試験の試験問題について、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

出題内容や出題範囲については、おおむね教科書に準じた内容から構成されていた。学習指導要領に示された範囲から出題されている問題がほとんどであったが、一部に「地学基礎」の範囲外の問題も見られた。

出題範囲を詳細に見ると「固体地球分野」が2問、「岩石・鉱物分野」が3問（うち2問が「環境・災害分野」にも分類できる）、「地史・地質分野」が2問、「大気・海洋分野」が5問（うち2問は「環境・災害分野」との融合問題）、「天文分野」が3問（うち1問は「大気・海洋分野」との融合問題）であった。

昨年度から新課程となり、学習内容は「地球のすがた」「変動する地球」の2項目となった。旧課程における「宇宙の中の地球」にあった「宇宙の構成」については、大幅に削減され、「変動する地球」の中で、「地球の変遷」という項目に位置付けられることとなった。

このことを踏まえ、新課程のもとで実施された試験として考えると、「天文分野」は「地球の変遷」の一部であるため、「天文分野」，「地史・地質分野」が同程度の出題数でもいいと思うが、「天文分野」が全15問中3問，「地史・地質分野」が全15問中2問となっており，「天文分野」の出題が若干多い上に、独立した大問になっている。また，「地史・地質分野」に関しては古生物に関する出題がほぼ見られなかった。このことを踏まえ，「天文分野」の独立した問題以外にも，「地史・地質分野」の両領域にまたがった問題の出題の検討などとして欲しい。

さらに，「天文分野」，「環境・防災分野」では同じ事項を扱う問題が連続したことも気になった。理科基礎科目は問題数が少ないため，1問の扱いが全体のバランスに大きく影響する。大問構成も含めて全体のバランスにはより慎重な姿勢が望まれる。

加えて，今年度は正誤の組合せを問う出題がなかったため，出題形式の工夫もお願いしたい。

内容については、思考力・判断力・表現力等を要する問題が昨年度と比べると減少したが、観察や実験に関する問題や、図やグラフを読み取る問題が出題され、おおむね共通テストの問題作成方針にのっとったものであった。しかし、一部問題では詳細な知識を求めるものや、掲載されている図では読み取りが難しいものもあった。

以下、幾つか個別の問題について述べる。

第1問Aの間2については、地震波から地震の発生時刻を求める設問である。内容的には地点A、Bの2地点の地震波の初期微動継続時間から、地点Aが地点Bの倍の時間であることを読み取って、地点A、BのP波の到達時刻の差分前の時刻にすれば分かる、大森公式を使わないが、思考を求める良問であった。

第3問Aの間1、2は宇宙と恒星の誕生に関する設問で、文章中の空欄補充により年代と組成の組合せを選択する問題で、出題範囲、問い方ともに似ているため、どちらか一方での出題でも良かった。正答率としては問1が38.49%、問2が83.03%と大きな開きはあるものの、問うている内容の難易度の差はそこまで大きくはなかったと思われる。

第4問の間1、問2は津波に関する設問で、問1は津波の発生原因や特徴、問2は津波観測システムの原理に関する計算問題となっており、津波に関して幅広く問えていた。問2の津波の速度の公式は地学の内容であるが、問題文に公式が記載されていたため、解答は可能であった。正答率は問1が85.02%、問2が77.33%と両問題ともに高く、受験者の防災意識の高さが反映されていた。一方で、問2に関してはより思考する力や読解する力を測るために、速度や距離などのパラメーターをグラフからの読み取りにするなどの工夫をお願いしたい。

第4問の間3は土石流と花こう岩の風化についての会話文形式の設問である。会話文中で物理的風化と化学的風化の説明が「オ」の前後で両方記載されており、二つの風化の違いについて詳しい知識が求められた。また、災害や岩石などの分野横断型の問題であったため難易度が高く、正答率は34.89%であった。

3 分量・程度

大問4問構成で、小問数は15問で構成されており、大問数、小問数とも昨年度と変更はなかった。ただし、新課程となり「天文分野」が「地球の変遷」の一部という扱いになったことを踏まえると、「天文分野」と「地史・地質分野」を融合させた大問構成とすることも考えられる。

全体としての分量は、妥当な量であり、多くの受験者は時間内に解答することが可能であったと考えられる。

各問題の配点は3点又は4点となっており、適切であった。選択肢数は4択が11問、5択が1問、6択が3問と、昨年度とほぼ同じ傾向であった。（昨年度は6択が3問で、8択が1問）。全体の難易度を、A（平易）、B（標準）、C（やや難）、D（難）と区分し、Aを6問、Bを5問、Cを2問、Dを2問と分析した。昨年度より、ややA、Bが減り（昨年度はともに7問）、Cが1問増え（昨年度は1問）、Dが2問増えた（昨年度は0問）。そのため、難易度が上がり、大幅な平均点の低下（昨年度から-6.32点）につながっていると考えられる。

以下、幾つか気になった問題について述べる。

第1問Bの間4は地質調査中に見つけた変成岩の特徴に関する問題である。「オ」について、選択肢の中で石灰岩と同じ炭酸カルシウムでできている鉱物が方解石のみであることが理解できれば正答を導けたが、分からなかった場合、大理石が方解石の集合体であることについては細かい知識であるため、難しかったと思われる。また、大理石の偏光顕微鏡の画像も顕微鏡画像から判断することは難解であり、正答率は24.78%と低かった。加えて、岩石Yの写真

が問題を解く上で活用できていないため、用いた写真が活用される問題構成をお願いしたい。

第2問Bの問3は深層循環と酸素飽和度に関する問題である。酸素飽和度と水深の関係に関する図に関しては教科書に掲載はないため、多くの受験者にとって初見の図であった。問題としては、文章中に深層では酸素供給がなく、徐々に消費されるとあるので、このことを理解し深層のみで図を読み取れば正答を導けたが、Yが表層のコンベアベルトと深層のコンベアベルトが重なる場所ととらえてしまったと思われる受験者が多く、23.51%と正答率が低かった。

第3問Bの問3は、太陽系について仮想の状況を想定した問題で、思考する力が求められた。答え方として誤っているものを選ぶ必要があり、それぞれの選択肢に関する深い理解が必要であった。また、選択肢によっては宇宙だけでなく、大気分野の知識を求められるなど、地学が幅広い分野にわたることを活かした良問であった。

4 表現・形式

全体として、受験者に分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいものであった。形式については、「項目判断」（該当する項目を選択する問題）, 「文章判断」（該当する文章を選択する問題）, 「計算」（計算が主体となる問題）の3項目に分類した。「項目判断」は11問であり、昨年度と同じであった。「文章判断」は2問であり、昨年度より2問減少した。「計算」を要する問題は2問であり、昨年度より2問増加した。また、「観察, 実験」に関する問題は、昨年度、一昨年度は出題がなかったものの、今年度は2問出題された。科学的な思考力・判断力・表現力等を育成することは地学教育においても不可欠である。そのため、今後とも観察, 実験的な要素を含む問題については、是非出題していただきたい。

以下、幾つか個別の問題について述べる。

第1問Bの問3は火山地形と火山噴出物に関する問題で、図は九州地方の火山をテーマにしているが、下線部(b)の選択肢について図から判断する上で、画像上に縮尺がないため、火山噴出物の広がりや九州になじみがない受験者には伝わりにくい。そのため、火山噴出物が海を越えて分布していることから判別するしかなくなっている。

第1問Cの問5は、白亜紀末期の大量絶滅に関する知識問題である。衝突の証拠としてイリジウム濃集層、直径約200kmのクレーターはともに幾つかの教科書に記載がないが、クレーターが隕石衝突の証拠として一般常識として覚えている受験者が多いと考えられる。その上で、②はクレーターが衝突した隕石よりも小さいという点で選択肢から外す必要があり、思考する力も求められた。そのため、受験者にとって難易度が高く、正答率は36.32%と低く、クレーターを選ぶ受験者の方が多かった。この問題を「イリジウム」と「直径1km」に下線を引き、正誤の組み合わせを問う問題であれば、正答率は上昇したと思われる。

第1問Cの問6は、褶曲に関する基本的な問題である。褶曲の出題は多くの場合、イラストで出題されていることが多く、実際の地表の写真で出題するのは目新しく、観察, 実験の問題としての意味がある良い問題であった。また、写真に褶曲軸や方角が丁寧に書かれていたため、傾斜は地学基礎ではなく、地学の範囲であるがあまり困らずに解答できる工夫がされていた。

第2問Aの問2はハドレーの概念図を用いた先生とソラさんの会話文形式の問題であった。ハドレーの概念図は初見の図ではあるものの、図がなくとも文章の内容だけで正答が導ける知識問題であり、正答率も77.17%と高いため、選択肢の内容をより大気の循環で出てくるような用語で作成しても良かったと思われる。

5 まとめ(総括的な評価)

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは、おおむね「地学基礎」の教科書に準じた内容から出題されていた。基本事項の理解をはじめ、文章や図、グラフから必要な情報を読み取ること、自然現象を地学的な視点から考察すること、自然災害や防災、地球環境の変化について考えることなどが求められた。高等学校では、知識・技能の習得とともに、日常生活や社会との連携を意識させながら、科学的に探究するために必要な資質・能力を丁寧に育成する必要がある。

○意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の8項目の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、要望・提案を行う。

- (1) 共通テスト問題作成方針を踏まえ、知識の理解を問う問題だけでなく、思考力・判断力・表現力等が求められる問題が見られ、バランスの取れた出題となっていた。
- (2) 出題内容や出題範囲については、おおむね学習指導要領の定める範囲内であったが、一部に「地学基礎」の範囲外といえる問題があった。しかし、与えられた情報で解答は可能であった。
- (3) 問題で使用された題材については、おおむね適正であったが、幾つかの教科書に記述のない事項が扱われていた。
- (4) 図やグラフを用いた問題は、普段の学習で経験してきたことを生かして考察する内容であった。また、地球環境や自然災害に目を向けるなど、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が複数あり、適切であった。
- (5) 大問は4問構成で、小問数は15問で構成されており、各設問の配点については3点又は4点で、難易度が高い問題が高い傾向にあった。選択肢数は4択が11問、5択が1問、6択が3問と、昨年度とほぼ同じ問題構成であった。
- (6) 一部に読み取りが難しい表現があったものの、全体として、受験者にも分かりやすい表現が用いられており、理解しやすいもので、おおむね適切であった。
- (7) 問題の難易度は、一部に難解な問題も含まれていたため、例年と比べ難易度が上がっていた。
- (8) 得点のちらばりはおおむね適正であった。

「地学基礎」の一部領域について、成績上位者であっても正答が難しい知識を問う問題が出題されていた。真摯に勉強に取り組んでいた受験者が正答を選ぶことができるような作問を是非お願いしたい。

今年度は異なる領域からの融合問題も出題された。一つの題材の中で様々な分野、領域を横断的に扱うという姿勢は、受験者の学習意欲の向上や目的意識の確立に大いに寄与するものと考ええる。与えられた情報を把握、整理し、更にそれらを再構築して新たな結論を導き出す力が求められるような出題もあった。

また、今年度は、高等学校の授業で想定される観察、実験等の活動についても問われた。共通テストの趣旨を鑑みると、今後も、観察、実験等の活動について扱う問題がバランス良く出題されることを期待する。

共通テストの問題には、地学教育という立場からの、高校生や社会全体に対するメッセージ性があると考ええる。地学では、地球環境や自然災害も含め、身の回りの様々な現象を扱っている。そのような身の回りの学問を意識させるような作問をお願いしたい。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意をもって作問された問題作成部会委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。

『地学』

1 前文

「地学」は、「地学基礎」との関連を図りながら、更に進んだ地学的な方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して地学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。

令和8年度共通テストの本試験の受験者数は463,535人（昨年度より2,030人増）であった。理科の延べ受験者数については、「物理」「化学」「生物」の受験者数が昨年度より2,799人減少した。一方、「地学」受験者数は2,701人で、昨年度より336人増加し、「物理」「化学」「生物」「地学」全受験者数の0.7%（昨年度は0.6%）であり、年度を追って少しずつ増加傾向にある。また、平均点は44.29点であり、昨年度より2.65点上昇した。

評価に当たっては、共通テストの趣旨である「大学への入学志願者を対象に、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする」に基づき、本年度の「地学」本試験の問題について、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

出題内容や範囲については、学習指導要領の定める範囲内であり、教科書に準じた内容で構成されていた。小問別に見ると「地球の概観」に関する設問が4問、「地球の活動と歴史」に関する設問が12問、「地球の大気と海洋」に関する設問が7問、「宇宙の構造」に関する設問が5問であった。5分野の「固体地球」「岩石・鉱物」「地史・地質」「大気・海洋」「天文」で分類すると、それぞれ6問、4問、6問、7問、5問と全体的にバランス良く出題されている。新課程では「地学」の教科書が1社になったため、出題範囲の偏りはない。

内容については、基本的な知識の組み合わせや文章による正誤判断、探究活動、観察、実験、野外実習、天体観測、さらには新しい趣向としてタイムマシンによる思考実験やAIを取り入れた観察、実験などを題材として扱い、基本的な知識の理解力や思考力・判断力・表現力等を問う問題など、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が多く出題された。一部の分野によっては詳細な知識を問う問題が見られたが、問題全体の内容としてはおおむね適切であった。

以下、個々の設問について意見を述べる。

第1問はタイムマシンによる思考実験をとおして、過去の地質現象や天文現象、さらには未来の系外惑星を題材に、地学に関する基礎的な知識の理解力を問う大問である。実際にあった過去の地学現象を扱い、観測や観察、実験の方法、観察結果から考察できることを題材にした小問で構成された分野横断型の総合問題である。多領域にわたる地学現象を、タイムマシンをキーワードに関連付けた新しい趣向の問題である。問1は地質時代の気候と示準化石に関する会話文形式の基礎的な問題である。問2は岩石の年代測定法に関する問題である。測定に使用される造岩鉱物や放射性同位体の半減期の長さに関する詳細な知識を必要とする。問3はアイソスタシーの原理を図から読み解く計算問題である。問4は現在の「かに星雲」の前身である超新星爆発が実際に観測された時代の人物との、会話文形式の問題である。鎌倉時代の明月記に関連させた教科横断型の良問である。問5は大気の大循環と環流に関する問題である。転向力、圧力傾度力、地衡流の総合的な思考力・判断力・表現力等を問う良問である。

第2問は固体地球に関する問題である。Aの問1は測量に関する問題である。出題のねらいを明確にするために注意すべき箇所の下線があり、容易に正答にたどり着く。Bの問2は長周期地震動に関する問題である。「地学基礎」の参考欄の内容で物理の知識を要する現象だが、日常生活経験から理解が容易な問題である。Cの問3と問4はホットスポットに加え、問3はプレート移動、問4は伏角の残留磁気とそれぞれ関連付けた問題である。問3は海山の移動距離を緯度から計算する必要があるが、基礎的な問題である。問4は伏角が緯度の影響を受ける点、残留磁気形成地点で記録される点、ホットスポットが固定点である点を包括的に考える必要がある良問である。しかし、正答率は14.8%と最も低かった。

第3問は地質と人類に関する問題である。Aの問1と問2はマグマに加え、問1は鉱床、問2はマグマの発生に関する問題である。問1の鉱床は教科書の参考欄に記載されているが、空欄アは詳細な知識を要し、難易度が高い。**イ**のように文章から考察可能な問題設定を望む。問2はグラフと図の両方の読み取りを要するが、平易な問題である。Bの問3と問4は地質調査に関する問題で、問3は地質図、問4は堆積構造の問題である。問3の傾斜の読み取りは平易で、露頭面が沢の北側斜面（真南向き）である点に注意すれば容易に正答にたどり着く。ただし、正答率は35.9%と高くない。問4は級化構造の正誤問題である。基礎的な問題で、図も見やすい。Cは火山に関する問題で、問5は火山灰の観察、問6は噴火形式と山体の形に関する問題である。問5のAIを用いた実験手法は新しい。ただし、鉱物のへき開の角度を問うのは、詳細な知識が求められ、難易度が高い。問6は基礎的な問題であるが、**ケ**は前文の「爆発的な噴火にならず」の一文のみで判断し、誤った受験者が一定数いた。Dの問7と問8は人類に関する文章の正誤問題である。問7はホモ・サピエンス以外の人類についての詳細な知識が必要であり、受験者にとってはやや難問である。問8は日本の第四紀の事象問題である。明確な誤りであるb・cの選択肢を消去する方法でも解答できるように、予め組み合わせの決まった四つの選択肢が用意されており、容易に正答にたどり着ける。

第4問は大気と海洋に関する問題である。Aの問1は熱圏、問2は霧日数、問3は熱帯低気圧、問4は海陸風に関する問題である。問1は基礎的な問題である。問2はフローチャート形式で内容は平易である。問3は南半球かつ対流圏上層の両方の要素を統合する思考力・判断力・表現力等が問われる。特に風が吹き出す上層の風向きは詳細な知識であり、難易度が高い。問4は会話文形式の基礎的な内容で、平易である。Bの問5と問6は地衡流に関する問題である。問5は固体地球のジオイドを組み合わせた分野融合問題であり、評価できる。問6は地衡流の原理をグラフから問う問題で良問である。グラフの縦軸を相対値にする工夫が見られる。

第5問は宇宙に関する問題である。Aの問1はセイファート銀河、問2は太陽大気の元素組成、問3はポグソンの式に関する問題である。問1は用語の組み合わせ問題で、**イ**のセイファート銀河の形は、詳細な知識を要する。問2は固溶体を組み合わせた分野融合問題である。グラフが示され、思考力・判断力・表現力等が問われる良問である。問3で問われている図1のスピッツァー宇宙望遠鏡の赤外線スペクトルは、受験者の多くは馴染みがない図で戸惑ったと思われる。また、リード文中の文字を太字にする配慮はあるが、問題の意図が難解で読み取りにくい。計算力も求められるため、難易度は高い。BはHR図に関する問題で、問4は恒星の寿命、問5は恒星の一生を問う問題である。問4はグラフの読み取りを要する計算問題で、難易度が高い。問5は恒星の終末期に関する平易な問題である。

3 分量・程度

大問は昨年度と同様に5問構成で、小問数は昨年度より1問多い28問で構成された。ページ数は

昨年度より3ページ多い36ページであった。図表やグラフを活用する設問は昨年度より2問多い17問であった。観察、実験や観測に関する設問は昨年度の4問から2問多い6問となり、計算問題は1問多い4問となった。また、昨年度よりも、思考力・判断力・表現力等を必要とする設問の割合が増加した。ただし、問題文の長さや分量は適切であり、全体としての分量は妥当であり、受験者は時間内に解答することが可能であったと考えられる。

選択肢は全て4択であった。昨年度は4択が21問、6択が5問、8択が1問だったことから、今年度は大きく変更された。なお、4択問題の平均正答率は約45%で、決して高くはない。

難易度については、A（平易）が8問、B（標準）が13問、C（やや難）が6問、D（難問）が1問と分析した。平均点は44.29点で、昨年度の41.64点より2.65点上昇した。その要因として、出題形式などが考えられるが、出題された問題の難易度は平均点上昇に反して確実に難化している。特に、年代測定法、金属鉱床、鉱物のへき開の角度、火山の噴火形式、人類の進化、熱帯低気圧、ポグソンの式、銀河の分類等については、教科書に記載されているが、本文中ではなく図の中や参考欄といった場所に記載された文言や数値が出題され、詳細な知識を問う問題であった。

4 表現・形式

リード文の表現は、全体として受験者に分かりやすい表現が用いられたり、太字や下線が付してあったりと、理解しやすい内容であった。また、多くの設問に図表やグラフが用いられるなど、全体的に工夫が感じられた。ただし、一部にリード文の意図が読み取りにくい設問があった。

形式については、項目判断：該当する項目を選択する設問、文章判断：文章を選択する設問、計算：計算が主体となる設問の3項目に分類した。項目判断は24問あり昨年度より5問増加した。文章判断は4問あり、昨年度より1問減少した。計算は4問であり昨年度より1問増加した。また、正誤の組み合わせ問題は3問あり、昨年度と同数である。出題形式のバランスは適切である。

以下、幾つか個別の設問について述べる。

第1問は、タイムマシンを用いた思考実験でまとめられた新しい視点からの問題である。地学特有の時間スケールをクローズアップした点は評価できる。また、扱った分野が地質、固体地球、宇宙、大気と海洋と複数の領域にまたがっており、分野融合問題の構成としても良い。

第2問Cの問4は、ホットスポットにより形成された各海山に残る残留磁気の伏角の値を示すグラフを選択する問題である。ホットスポットの緯度は一定であり、その緯度における地磁気の伏角は変化しないことを理解していれば解答できる。しかし、伏角の緯度別の具体的な値を示す表1が提示されたことで、ホットスポットが「固定点」であることより、海山が現在位置する「緯度」に意識が向けられ、惑わされた受験者がいただろう。工夫が見られる良問である。

第5問Aの問3は赤外線スペクトルの明るさの等級に関する計算問題である。ポグソンの式の理解度が求められるが、リード文の意図が読み取りにくく、「10分の1」「等級の差の20倍」などのリード文中の情報も注意深く読む必要がある。減光現象を扱っていることも難易度が高くなった要因の一つと思われる。ただし、設問形式の工夫がみられ、**オ**の解答が**力**につながっているが、選択肢の「2.5」に気付くことで**力**を求めることが可能となっている。

5 まとめ（総括的な評価）

○高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは、「地学」の教科書に準じた内容から、基本事項の理解を問う問題が出題された。また、観察、実験及び思考実験について、グラフや図から情報を読み取り、考察する問題も出題され、地学的な思考力・判断力・表現力等を見る問題が様々な形式で出題された。高等

学校では、基本事項の理解や用語を覚えるだけにとどまらず、観察や実験を実際に行い、観察や実験の結果をグラフ化する力、グラフを読み取る力をしっかりと身に付けることが必要である。

○意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、前述の8項目の観点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

- (1) 問題作成方針を踏まえ、全ての分野・領域からバランス良く出題されているが、分野によっては詳細な知識の理解を問う問題が出題された。
- (2) おおむね学習指導要領の範囲内から適切に出題されているが、設問によっては詳細な知識を問われるものがあった。
- (3) 問題で使用された題材は、新課程の教科書が1冊しかないため、特定の教科書への偏りは考える必要はなかった。
- (4) 探究活動、観察、実験、野外実習に加え、タイムマシンを用いた架空の思考シミュレーションなど共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が複数あり、適切であった。
- (5) 全ての問題の選択肢数が4択であり、問題文の量や設問形式は適正であった。
- (6) 文章表現・用語は、教科書を基にしたもので適切であった。
- (7) 分野によって詳細な知識の理解を問う設問や、読解力を要する計算問題を含む思考力・判断力・表現力等が求められる設問が見られ、やや難易度が高かった。
- (8) 得点のちらばりはおおむね適正であった。

今回は、「地学」の内容を確実に学習した受験者が、時間内に解答できる分量と内容である。また、観察、実験、野外実習やAIを取り入れた新しい手法の実験を扱った出題は、共通テストの問題作成方針に則り、探究的な学びを促す役割を果たしている。

地学は総合科学であり、それぞれの分野の知識が様々なところでつながっている。今年度は各分野が融合した問題が複数出題された。このような出題は地学現象の深い理解につながり、歓迎するものである。特に第1問のタイムマシンのように、あるテーマに沿った分野横断的な問題は、地学の特性を感じさせ、受験者の興味を大いに喚起すると思われる。次年度以降もどんなテーマで出題されるのかが楽しみである。今後も無理のない範囲で出題を続けて欲しい。

平均点は、再び2年連続40点台となった。出題形式や出題内容などに工夫がみられるが、受験者数の少なさから得点調整が見込めない科目だけに、是非、一昨年同様の50点台後半の平均点となる作問がなされることを期待したい。

今後も受験者の側に立った難易度、分量、全体のバランスを考慮していただき、平均点を6割程度にするための問題作成の工夫をお願いしたい。正答率を上げていかないと共通テストの「地学」受験者、ひいては「地学」履修者も増えてはいかないと思う。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意を持って作問された問題作成部会委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して、深く敬意を表したい。